未知なる世界の向こう側

気まぐれな黒猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
未知なる世界の向こう側

【Ｎコード】
Ｎ６９７４Ｉ

【作者名】
気まぐれな黒猫

【あらすじ】
高校の一大イベントである修学旅行当日の朝に、突如異世界に飛ばされた少年、深泉　鏡が送る異世界ライフである。
―この物語りは主人公最強ものです、それが苦手な方はお読みにならないようご注意ください―

００ープロローグ

辺り一面に広げられた緑の絨毯。
日は高く、位置からしてそろそろ昼時ではないかと思う。
ポカポカとした陽気に、横になればさぞ気持ちよく眠ることができるだろう。
また、時折草原を駆け抜ける風が頬を撫でるその心地よさもたまらない。
そんな景色の中に場違いなほどの厚着をした少年がぽつんと立ち尽くしている。
そして、おもむろにこう言ったのだ。
「テンプレ過ぎるだろう・・・これは」

早朝、まだ日が昇る前の時間に起きだして手早く洗顔と歯磨きを済ませ、動き易い格好に着替えて家を出る少年。
彼は深泉（ふかいずみ）鏡（あきら）、歳は今年の誕生日で１８になる高校二年生だ。
今日も彼は日課である体力作りを欠かさないために川原に来ていた。
しっかりと柔軟、体操をして体をほぐし、それから1時間のランニング。
全力の8割ほどの速度でひたすらに走り続ける。
それが終われば今度は空手の正拳突きを１０００回繰り返す。
そうしてしっかりと気合が入ったところで木刀の素振りを１０００回する。
もちろん踏み込みも忘れない。
ちょうど素振りが終わることになると太陽が顔を出すので、朝日を浴びつつ両の掌を合わせ瞑想する。
澄んだ空気を鼻から吸い込んで、ゆっくりと口から吐き出す。

この動作は漂う“氣”を感じるとるためのに行なうと師範が言っていた。
が、鏡は未だにどういった物なのか把握しては居ない。
それでも行なうのは、気持ちを落ち着かせる意味合いもあるからだ。
一連を動作を終え、気持ちを落ち着けたら今度は腹筋、背筋、腕立て、スクワットを各１００回３セットづつ繰り返し、家に戻る。
なぜこんなことをしているのか。
最初は現代っ子の体力等の身体能力低下を嘆いた両親がとある道場に、小学生の時に入れられた事から始まったのだが、今では逆にこれを欠かすと何だが落ち着かないのだ。
家に着くとそのままシャワーを浴びて汗を流し、母親が作った朝食を取る。

「鏡、今日は修学旅行で集合が早いんでしょ？　そろそろ行かなくて大丈夫なの？」

そう言われて時計を見ると7時２０分を示していた。

「あ、そろそろ行くよ」

いつもならもう少しノンビリしてから家を出るのだが、今日は母の言うとおり、修学旅行に出発するためにいつもより集合時間が早いのだ。
シャワーを浴びたときに制服に着替えておいたので、自室には荷物を取りに行くだけだった。
階段を登り、突き当たりにある部屋のドアを開け、充電してある携帯をポケットにしまいお気に入りの音楽再生機、Ｉ○ｏｄのイヤフォンをつけ音楽を流す。
愛用のマフラーも忘れずに首に巻きつけ、最後に忘れ物が無いかチェックをして家をでた。

いつも通る通学路なのだが、いつもより少し早い時間に出ただけで、何か違う雰囲気を纏っているように思う。
鏡は日常のささやかな変化を見るのが好きだった。
日に日に赤く色づく木々の葉やだんだんと冷たくなっていく風などに、ついつい頬が緩んでしまう。
思わずスキップしてしまいそうな気分になりながらも学校を目指して歩いていると、ふとぼんやりとした何かが道の真ん中に浮かんでいるのに気づいた。
なんとも形容しがたいそれは、最初、見間違いかと思い目を擦っても何をしても消えないので、そこに何かあると判断し、ゆっくりと手を伸ばしたとき、浮かんでいた何かが広がり、鏡を包み込んだ。

「そして気がついたら草原のど真ん中」

突然のことに混乱していた頭を、順序だてて何をしてきたかを思い出し、整理し落ち着ける。
『何があっても慌てず、騒がず、状況を見極めることが大切だ』という師範の教えに基づき、冷静に考える。

「信じられないけど・・・どうやら異世界に迷い込んでしまったらしい」

現状では先の超常現象をそう解釈するしかなかった。

「このまま、テンプレで行くのならば襲われてるお姫様ご一行とかがいそうだな」

と苦笑めいて、荷物を持って歩きだした。

00 プロローグ（後書き）

週1くらいで更新したいと思います。

01 二人の男

例えば、草原で見かける動物といえばなんだろうか？
シマウマ、キリン、ゾウこれらの気性の大人しい動物ならまったく持ってかまわない。
ライオン、トラ、チーターなど、肉食動物であっても見たことがあれば、身の危険は感じれど、さほど驚かないだろう。
なんで今こんなことを話しているのかって？
現実逃避だよ。
目の前に迫るのはどう控えめに見ても地球じゃお目にかかれないような異形な生物。
何が近いかと言えば、ヤモリとかイモリとか言うのを成人男性大まで大きくしてさらに、肌の色を緑色に変えた姿が一番近いだろう。
精密に言えば手先の爪なんかは猫科の動物が持つものに近く良く切れそうで、口から覗く歯はどんな硬い肉でもあっという間に食いちぎれそうなほどだ。
何が言いたいかというと、ピンチだ。
テンプレ通りに何かあればな、とは思っては見たが……流石にこれは予想外だ。
どうすれば逃げられるか、どうすれば生き残れるかを必死に考える。

1，戦う
↓2，逃げる

ろくな選択肢が無いとか言うな！
異世界に着て早々こんなことになれば選択肢など多いわけが無い！
というわけでさっさとヤモリもどき（仮名）に背を向けて全力疾走を開始した。

３０分くらい走っただろうか、どうやら街道のようなそれなりに舗装された道を見つけることができた。
しかし、その街道少し手前でヤモリもどきに追いつかれ、じりじりと後退せざる得ない状況になっている。
どうすればこいつをうまく掻い潜って街道に出られるか・・・。
今度ばかりは逃げるという手段は使えないため、ヤモリもどきと対じしながらゆっくりと半円を描くように移動していると、背後でがさりと言う音がして、直後背筋を走る悪寒に身を屈める。
すると、先ほどまで自分の頭が会った位置を風を切る音と共に何かが通り過ぎた。
恐る恐る振り返ると、新たに出現したらしいヤモリもどきがこちらを睨んでいた。
こういうのを泣きっ面に蜂って言うんだよな～などとまたも現実逃避を始める鏡に救いの手が差し伸べられた。
どこからとも無く飛んできた火の玉が目の前に居るヤモリもどきにぶつかり、一瞬でその体を燃やし尽くした。
突然の火に、背後に居た奴は逃げ出したらしく、振り返ってもそこに姿は無かった。
安堵のため息をついた後、辺りを見回すと黒いマントに身をつつんだ、いかにもな感じの男の人が街道から道をそれこちらに向かってきていた。
男の人が近くまで来るのを待って、御礼をいを言う。

「危ないところを助けていただき、本当にありがとうございます」

そういって頭を下げた鏡に男の人が話しかけたのだろう。
なにやら聴きなれない異質な音が聞こえてきた。

「ウェくぁｄｓｚｘｃｒｔｙｇｈｂにお.ｊｋｌｍ」

頭を上げてその男の人を見る。
お互いに何を言っているのか分からなかったのだろう。
しばらく無言で立ち尽くすしていたが、ガサっと近くの草が揺れる音がするのと同時に男の人が鏡の手を掴み走り出した。
そのまま引っ張られるように街道を走ると遠くに町が見えた。
その門前には熊のような体躯の斧をもった男こちらに手を振っていた。
マントの人に連れられて熊の人の近くまで行くと、怪訝な顔で見られた。
相変わらず何を話しているのか分からないが、熊の人が大声を上げて笑いながらマントの人の背中をバシバシと叩いていた。
そんな光景を一歩引いたところから眺めぽつりと呟く。

「テンプレで行けば言葉が通じるはずなんだけどな、世の中甘くないと言うことか」

どうやら疎通に関する魔術は無いようで向こうの言葉を覚えるところから始めなければならないらしい。

「神童と呼ばれた事もあるんだ、いっちょやってみますか」

そう決意を新たにたところでマントの人が手招きをしているのでそちらに向かった。
近くまで行くと、今度は手首を握られてまた歩き始める。
門をくぐり町の中に入ると、中央通は人でごった返していた。
その端には露天商が所狭しと商品を並べて客引きをしている。
それらの見慣れぬ物に目を奪われながらも手を引かれているので立ち止まることもできずに、ただただ街中で交わされる言葉を頭の中

に刻み付けていくのだった。
そうしているうちにふと引かれる手が離されたので何事かを思ったら、酒場のような場所の前にきていた。
熊の人がその中に入っていくのを見てからマントの人も続く。
たぶん、ついて来いって言ってるんだろうと当たりをつけて酒場のような場所にはいる。
店内は昼間だからなのだろう人はまったくおらず、用意された丸い机とそれを囲むように置かれた椅子がなんともな雰囲気をだしていた。
物珍しそうに店内を見回していた俺をマントの人が肩を掴み、ある方向を指差した。
そちらに顔を向けると、熊の人が階段を登っていくのが見えたのでそれに続くように言われているらしい。
慌てて階段を上ると2階のところで熊の人が待っていて、俺が来たことを確認すると延びている廊下の方へ行き、一番奥の部屋の前で立ち止まる。
ドアを開け、俺を指差す。どうやらここの部屋を使えということらしいので部屋を指差した後自分を指差した。
すると熊の人は驚いた表情をした後、笑顔で大きく頷いた。
そうして今度は隣の部屋を指差し、マントの人と自分を指差す。
たぶん、この部屋に居るから何かあれば来いということらしい。
俺は大きく頷いてから部屋に入り荷物を降ろした。

01二人の男（後書き）

ちょっと張り切ってみました☆ミ
次週から週1で更新していきます。

02 二人の名前

「流石に僕もびっくりだよ。3日で言葉を覚えきるとはね」
「そんなことないよ、エトライの教え方が上手かったから覚えやすかっただけさ」

俺が彼らに助けられてから早5日、ある程度は喋れるようになった。最初の2日間は酒場や街中で交わされる会話をひたすらに聞きまくり発音を覚えて、次に使われるタイミングやなんかから意味を推測した。
そうしてなんとなく話せるようになってきたところでマントの人、エトライに言葉を教えてくれと頼み込んだのだ。

「しっかし、エトがお前さんを連れて来た時は驚いた。最初は魔物にでも追われてんのかと思っちまったくらいだからな」

豪快に非熟成(エール)麦酒の入ったジョッキを飲み干しながらテーブルの上に置かれたつまみに手を伸ばす熊の人、もといリアードの魔物に見えたという言葉に言い返す。

「俺もびっくりしたさ、手を引かれてつれてこられたところには熊が斧背負って立ってたんだからさ」

そんな俺らの言い合いの中、エトライが吹いた。
飲んでいたジョッキを置いて咳き込んでいる。
おそらく気管支に入ったからだろう。

「リアードが熊か、違いない」

自分で言ってつぼにでも入ったのだろう、エトライはテーブルに突っ伏して震え始めた。

「熊たぁひでーな、そんなに毛深くねーよ」

「お前が毛深くなったら最早熊ですら逃げ出すだろうな・・・ククッ」

確かに、リアードは2メートルを軽く超える長身に成人男性の三倍から四倍の体格をしているのだ。

それだけでも威圧感抜群なのに、これで毛深くなったら・・・・・・考えるだけでも恐ろしい。

「ん、酒が切れちまったな」

リアードが空になったジョッキを置き、新たにエールを頼む。

それに便乗して俺も飲み物を追加注文した。

「そういやよぉ、アキラはこの国に何をしにきたんだ?」

今思い出したかのようにリアードが尋ねてくる。

リアードのことだからたぶん忘れていたのだろう。

二人の役割は見たまんまで頭を使うのはもっぱらエトライの仕事なのだが、肝心のエトライは未だテーブルに突っ伏したままで復活するまでにはもう少しかかるだろう。

「いや、何をしに来たと言うよりは気づいたら草原のど真ん中に居て、歩き回ってたら緑のトカゲに襲われて逃げてる最中にたまたま街道を見つけたって感じなんだ」

「緑のトカゲ・・・・・・そりゃ、たぶんプレーリードラゴンだな。だがあんなのくらい倒せねーと冒険者としちゃやっていけねーぞ」

追加されたエールを煽りながらリアードが気になる単語を漏らした。
冒険者・・・意味合い的には冒険をする者なのだろうが、一体なぜ俺がその冒険者になるのだろうか。
俺が考えに浸っているといつの間にか復活したエトライが残してたエールを一気に飲み干していた。

「ふぅ、酷い目にあった」

酷い目、というよりかは勝手につぼにはまって笑い転げてただけだろう。という突っ込みをかろうじて飲み込んだ。なんとなく突っ込んだら負けな気がしたんだ。

「それよりアキラ君、先ほど気がついたら草原に居た。と言っていたけど、草原に来る前はどこにいたんだい？」

急に真面目な顔になったエトライに、空気を察したのかリアードも黙って俺の方を見ている。

「信じてはもらえないかもしれないから黙っていたけど、俺は異世界から来たんだ」

異世界という単語にエトライとリアードの眉がピクっと動いた。

「異世界といやぁ・・・・・・」
「あぁ、数日前にクルエラ王国に迎えられた者が異世界から来たと言う噂を聞いた。てっきり眉唾物だとは思っていたが・・・・・・」

その話を聞いて今度は俺が反応した。
俺以外にもこの世界に来てる奴が居る・・・？

ともすれば元の世界に帰る手段が分かるかもしれないという期待が膨らんだ。
両親はきっと心配しているだろうからできるだけ早く帰りたい。

「その人の容姿とかって・・・」
「女性であるということ以外は」

残念そうに首を振るエトライに俺は若干肩を落とした。

「まぁ、一度クルエラに行って会って見るのがいいかもしれねーな」

それを見ていたリアードが提案してくれているのだが、残念なことに俺はこの世界の地理をまったく知らないのだ。

「行きたいのは山々だけど、そのクルエラ王国がどこにあるのか分からない」
「何言ってやがる、俺たちが居るだろう」

リアードはそう言って自分の胸をドンと叩く。

「あぁ、出会いに偶然はありえない。僕たちが出会ったもの何かの縁だし、ちょうどクルエラには用があったところだからね」

エトライは俺を見て頷いた。

「助けてもらったことといい・・・ありがとう、二人には感謝してもきしれない」

俺は二人の優しさに、深く感謝して頭を下げた。

「しかしそうなると・・・・・・アキラ、何か武器は使えるかい？
毎朝、日が昇る前から体を鍛えているようだけど」
「えと、一応木刀と弓は持ってるけど、戦いとなると、自信はあんまりない・・・・・・。けど、武器が使えることに何か意味があるの？」

俺はエトライに聞き返す。
この数日で知ったことなのだが、街道には魔獣避けが施されているから比較的安全なのだ。
たまに魔獣以外が出るが、所詮エトライとリアードの敵じゃないだろうし、人間相手なら拳闘でも十分だろう。

「ここからクルエラに向かうとなると、どうしても魔の巣窟を取らなくちゃならない。あそこの魔獣は生半可なことじゃ倒せないほど強力なんだ」
「だからそうなるとおめーを守りきれなくなっちまうこともあるんだわ」
「そこで、アキラにも最低限自分を守るだけの実力を見につけてもらいたいんだ。魔獣の血は強い酸性だがら素手じゃ倒せないしね。もっとも、行くのを諦めるって言うのも手だけど、どうする？」

どうすると聞かれても俺の答えは変わらない。
二人を見て力強く頷いて返した。

「それじゃぁ、明日にでもおめーの実力を測るから今日はしっかり休んどけよ」

俺の返事に、今までに見たことのないほど好戦的な笑みを浮かべるリアード。
それに俺も同じ笑みを浮かべて返した。

翌日、朝の日課を果たし朝食を取った後、宿の裏手にある訓練場でリアードと向かいあっていた。
俺の手元にあるのは使い慣れた木刀と弓道部で使う弓と矢。

「おっし、それじゃ行くぞ。手加減しねーからな、怪我すんなよ」

それは無茶だとか思いながらも纏う雰囲気がガラッと変わったリアードを警戒した。
すると、リアードの笑みがいっそう深くなり直後、先制攻撃を仕掛けてきた。
木斧による横薙の一閃を屈んで掻い潜り、相手の胴目掛けて木刀を振るう。
しかし木斧の柄で防がれ、反撃とばかりに繰り出された蹴りを木刀を盾代わりにしつつ後ろに飛んで衝撃を殺す。

「なんでいアキラ、こんなもんか」

そう言われた直後、吹き出した殺気に俺は身を硬くしてしまった。
模擬戦とはいえこれでは狙ってくださいと言っているようなものだ。
強ばった体を無理に動かして構えを取るが既にリアードの振るった木斧の軌道からは逃げ切れないと判断し、木刀で流すようにぶつかった。
それでも流しきれなかった衝撃に吹き飛ばされた。
ニ、三度地面をバウンドした後地面に手をついて何とか体を起こす。
なんつーでたらめな力だ、柏ノ木でつくった木刀じゃなかったら確

実に折れてたぞ。

「ほう、武器をへし折るつもりでいたんだがな。まあいい、次で止めだ」

自分に向けられた殺気がさらに強まる。
こんな訳のわからないところで死ぬわけには行かない、生きて地球に帰るんだ！
鏡は他の事を考えるのをやめ、目の前に迫る死の恐怖を打ち破ることに専念した。

木刀を捨てて立ち上がり、目を閉じて掌を合わせる。
無意識にかけていた自制心というリミッターを、死ねないという意志とリアードから放たれる異様な程の殺意による恐怖によって外した。
先ほどとは纏う空気が激変した鏡を警戒していたリアードは不意に目の前の鏡が消えたかと思った瞬間、木斧を左側に振るった。
そこに視線を向けると振り切った木斧に手を添えている鏡が見えた。

『木の呼吸、感じるは生命の息吹』

鏡が自国語で何かを呟いた後、木斧の柄を手刀で絶ち切った。
驚愕するリアードに肉薄した鏡はまたも日本語でボソリと呟いた。

『内包する衝撃は、内側の破壊を促す』

リアードは長年培った直感により、鏡が放つ攻撃をまともに食らったらヤバいと悟り後ろに飛ぶ。

それでも鏡からは逃げ切れず、添えられるように押し付けられた拳から伝わった衝撃に膝を着いた。

放たれていた殺気が霧散し、それに伴ってだんだんと落ち着いてきた鏡は目の前で膝をつくリアードとその後ろで杖を構えているエトライを見て構えを解いた。

「俺に膝をつけさせるたぁおめー、つえーじゃねーか」

がははと笑いながら立ち上がるリアードはダメージを全く感じさせないタフさに驚きつつも安堵した。
先ほどの、衝撃を内側に押し止める技、内撃は直撃していたらかなり危険だった。

「少々不安定ではあるが、申し分ないだろう」

リアードとエトライになんとか合格をもらうことができた。
俺が安堵してその場にへたり込むと、何かを思案したエトライがすっと手を差し伸べてきた。

「アキラの実力はわかった、それだけの実力があるならばリアードに指導してもらわなくても大丈夫だろう」

俺はその手を取り、体を起こしながら尋ねる。

「指導されてたらどうなってた？」
「七日間は筋肉痛が治らなかっただろうね」

苦笑しつつも合格をもらえてよかったと安堵した。

「さて、では早速クルエラに向かうとしよう」

「おう、その前にこいつをギルドに登録しにいかねーか？」

歩きはじめていたエトライは立ち止まり、しばらくその場で思案していたが「そうだな、そっちの方が何かと都合がいい」と言って急遽ギルドに登録しに行くことになった。

「ギルドってなに？　どういうところ？」

「そりゃ・・・・・行ってからのお楽しみってやつだ」

「・・・リアードに聞いた俺が馬鹿だったよ」

ため息をついて先を歩いていたエトライに並ぶ。

「ギルドの説明は受付の時にしてもらえる。知りたいことがあればそこで訪ねればいいだろう」

エトライにアドバイスをもらい、俺らは宿を後にしてギルドに向かった。

03 ―ギルド

比較的大きな通りに面した一角にあったその建物に思わず入るのをためらった。
理由としては簡単で、いかにもヤのつくような人からそこに居るだけで威圧感を放つ人など、あまりお近づきになりたくないような人でごった返していたからだ。

「お、どうしたアキラ置いてくぞ」

そんな雰囲気を物ともせずに堂々と建物に入っていく二人に続いて、恐る恐る建物に入る。
建物の中は思っていたのとは違い、さっぱりとした感じで入り口からみて左側に受付窓口があり、その左隣に大きな掲示板のような物がある。
受付の向かい側には二階に上がる階段とちょっとしたテーブルと椅子が置かれている。

「新規登録は左側のところだな」
「わかった、ちょっと行ってくる」

二人に言われたとおり、受付の一番左の窓口に向かった。
受付には綺麗なお姉さんが居てなんか話しかけずらいと思っていると、それを察してくれたのだろうか向こうから話しを振ってきてくれた。

「おはようございます、本日のご用件はギルドへの新規登録でよろしいでしょうか？」
「あ、はい」

営業スマイルなのだろうが、その笑顔にどぎまぎしてしまう。
なんせ俺とて男なのだ、美人さんに微笑まれれば緊張くらいする。
「では、ギルドについてのご説明はいかが致しましょうか？」
「お願いします」

がちがちになりながらもそれを悟られないように普通に接するようにする。
それでもばればれなのだが。

「かしこまりました、それではギルドについてご説明します。
ギルドとは一般市民や商人、貴族の皆様方から寄せられた依頼（クエスト）を統括するところになります。依頼はギルドに登録された冒険者の方のみ受けることができます。依頼にはD~Sまでのランクがあり、自分より一つ高いランクのクエストまでしか受けることができません。これは冒険者の安全を考えてのことですのでご了承ください。依頼報酬についてですが、指定されたランク以上の依頼だった場合、そのランクの報酬をお支払いしますのでお申し付けください。また、依頼主、冒険者同士でのトラブルにはギルドは一切関与いたしませんのでくれぐれもそういった苦情をギルドに持ち込まないようお願いします」

すらすらと説明される内容をしっかりと頭に詰め込みながら疑問点を探す。

「ランクを上げるにはどうすればいいんですか？」
「ランクを上げるにはギルドの方で指定されたモンスターを討伐していただき、倒した証として依頼書に記載されたモンスターの部位（ク）を持ち帰っていただくか、自分より高いランクのクエストを15回（リア）

達成する。ないしは自分より指定ランクの高いモンスターを２０匹倒したという証を持ち帰っていただきます」
「他にはなにがございますでしょうか？」
今のところ疑問に思うところはないし、最悪エトライかリアードのどちらかに聞けば解決するので大丈夫だろう。
「いえ、大丈夫です」
「それではこちらに必要事項をご記入ください」
そういって差し出された羊皮紙と羽ペンを受け取った。
文字は言葉を教えてもらいながら一緒に教えてもらっていたので少しなら書くことができる。
が、書きづらいことこの上ない。
「あ、名前って本名じゃなきゃダメですか？」
異世界だから大丈夫だろうがあまり本名をさらすのは好きじゃない。
「いえ、偽名でもかまいませんが、以後変更できませんがよろしいですか？」
なるほど、変更はできないのか、まぁ、別に構わないだろう
俺は羊皮紙の空欄を埋めて受付嬢に渡す。
「では確認させていただきます。お名前はミラージュ、年齢は１８歳、男性、種族は人間でよろしいですね？」
「はい」
羊皮紙に書かれたことを半数し、間違いがないことを確認すると、

受付のおねーさんは少々お待ちくださいと言って奥へと下がった。
緊張がとけ、ふぅと息をつく俺のところにまるで狙ったかのように絡んでくる連中がいた。

「ここはおめーみてーなガキの来るところじゃねーぞ」

どう見てもごろつきとしか思えない連中など、地球でも何度相手にしたかわからないくらいだ。
こんな連中は無視するに限る。
しばらくは脅しだの威嚇だのをしてきたごろつきどもだが、俺がまるで相手にしていないことに腹を立てたのか連中が掴み掛かってきた。

「ガキが無視してんじゃねー！」

やれやれと思いながらも伸ばされた手を掴み、肘と手首の骨を外そうとしたとき

「おいおい、こんなところで問題なんて起こしたらギルドからの依頼受けらんなくなるぞ」

座っていたはずのリアードがごろつきの後ろに立っていた。
リアードはちらりと俺を見たあとごろつきを威嚇するように睨み付ける。

「なんなら俺が相手をしてやってもいいぜ。　もちろん表で、だけどな」

ごろつきたちはリアードを見た瞬間「ちっ」っと舌打ちをしてギルドから出ていった。

それを見送った後、威圧感の消えたリアードはイタズラを思いついた子供のような顔で俺のことを見ていた。

「助かったよリアードって、その顔気持ち悪いんだけど・・・」
「気持ち悪いとは何だ！　まぁそんなことは置いといてお前、今何しようとした？」

そういわれて、普通に骨を外そうとしたと答えようとしたところに受付のおねーさんが戻ってきた。

「お待たせいたし・・・あら、リアードさんどうかしたんですか？」
俺の隣に立つリアードに驚いた様子も無く普通に接する。
その砕けた様子から思うに、どうやら知り合いらしい。

「おう、こいつが絡まれてたんでな」

バシバシと背中を叩いてくるリアードから一歩横にずれて逃げる。

「リアード、知り合いだったの？」

俺が尋ねると答えてくれたのは以外にも受付のおねーさんだった。

「えぇ、ギルド内においてリアードさんとエトライさんを知らない人は居ないですよ。彼らはそれだけ優秀な冒険者なんです」

確かにあの規格外の力とスピードならば納得するが、ではエトライは？
と考えていると、おねーさんが何か書類らしき物をリアードに渡す。

「それよりもリアードさんとエトライさんに王都からじきじきの依頼が着てますよ。詳しくは支部長がお話しするそうなんで支部長室へどうぞ」

リアードは書類を受け取ると「それじゃ後で」と言ってエトライの所に戻っていった。
リアードが居なくなるとおねーさんは書類を置き立ち上がった。

「それではミラージュさんには試験を受けてもらいます。案内しますのでこちらへどうぞ」

おねーさんに着いて行くと闘技場の控室ような部屋へと案内された。
壁にはいろんな種類の武器が掛けられている。
それこそ剣や槍に始まり弓、鞭、斧、果てにはカタールなんて物まである。

「武器はここにあるものをご自由にお使いください」

どれでもいいと言われても困る。
試験というからには試験管がいるのだろう、だが下手したら勢い余って殺してしまうかもしれない。
それだけは勘弁だ。
そんなことを考えながら武器をどれにするか迷っていると、おねーさんの説明が聞こえてきた。

「これから行なうのはランクを決めるための模擬戦ですが、実際のモンスターを相手にしてもらいますのでくれぐれも無茶をなさらないようにお願いします」

相手にするのはモンスター？

それを聴いた瞬間に武器は決まった。
怪我を心配しなくていいのだから、俺は迷わず弓と矢を手に取った。

「・・・・・・武器の方はそれでよろしいですか？」

よほど以外だったのだろうおねーさんはなにやら不安げな表情だったが俺が大丈夫ですと答えると、入ってきたのとは別の扉を開いた。

「では、ご検討を」

そういわれ、力強く頷いてから扉をくぐった。

０３ ―ギルド（後書き）

なんというか、表現力が乏しいと感じるこのごろ・・・・・・。
ご意見／感想などあれば

０４ー試験とモンスター

扉をくぐった先は簡素な造りの闘技場のような広場だった。
入った扉の対面にある鉄格子の降りた通路があり、右手側にはギルドの二階部分に当たるところがガラス張りになっている。
テーブルに着いた幾人かの冒険者たちがこちらを見ながら談笑している所を見ると酒の肴になっているらしい。どうやら他にも目的はありそうだが・・・。
俺が数歩進むと扉が閉まり、カシャンという音がして扉の前に鉄格子が下りていた。
逃亡は不可能って訳か。

「ほう、弓を武器とする奴は珍しいな」

そういわれて声のするほうへ顔を向けると、入ってきた扉の近くに試験管らしき貫禄のあるおっさんが椅子に腰掛けていた。
見た感じでは４０過ぎくらいだろうか。髪は短く刈られ、剥き出しの腕にはいくつもの生傷が見える。

「これからお前の実力がどれほどのモノか試させてもらう」

試験管らしき貫禄のあるおっさんは座ったまま右手を上げる。
すると、対面にあった鉄格子が上がり、中から得体の知れない生き物が這い出てきた。
その気色悪さに思わず後ずさってしまった。

「ワームだ」

顔を引きつらせている俺に、試験管らしき貫禄のあるおっさんはモ

ンスターの名前を伝え俺を睨む。
どうやらさっさと行けと言いたいらしい。
だが、後ずさるのも仕方ないと思う。
人間と同じかそれ以上の大きさの芋虫など、誰がどう見たって気持ち悪いだろう。

「ったく、気色悪いな～・・・」

そう言いながらもしっかりとワームを見据え、弓を引く。
限界まで引かれた弓を放すと、放たれた矢は弧を描くようにワーム目掛けて飛んでいった。
もちろん狙いは眉間、どんな生き物でも脳をやられたらそれでお終いだ。
それに、始めて使う弓だったが狙い違わすしっかりと飛んだことに多少なりとも得意げになっていた。

「んな！」

結果だけ言うとすれば見事に矢はワームに直撃した。
だが、当たったには当たったが、その皮膚に矢が弾かれたのだ。
カーンとかいう甲高い音つきで・・・・・。

「距離があったとはいえ、今の音ってどんだけ硬いんだあいつ！」

攻撃をされたと分かったワームは標的を鏡に絞り、見た目とは裏腹な恐ろしい速度で突進してきた。
例えるなら自転車を全力で漕いだくらいのスピードである。
それなりにあった距離はあっという間に詰められ、寸でのところで横に飛び退いて回避する。
体勢を立て直して過ぎていったワームを見ると、俺が入ってきた扉

の鉄格子に激突して止まっているところだった。
ついでに言うと試験管らしき貫禄のあるおっさんはいつの間にか立ち上がって距離を取っていた。
鏡はワームがこちらを向いていないことを幸いと矢筒から矢を二本取り出して同時に放つ。
しかし、またしても弾かれるだけで終ってしまう。
舌打ちをしてワームから死角になるように動きつつ距離を取る。

「今のでもダメならこいつはどうだ！」

ワームに狙いを定め、弓に掛けた矢を捻るようにして引き絞る。
限界まで捻り絞られた弓を放つと、矢は回転しながら真直ぐにワームに向かった。
弓を下ろし、矢の行く末を見守っていると、放たれた矢はきれいにワームの横っ腹に突き刺さった。
すると、ワームが甲高い声を上げた。

「ほう、あの皮膚を打ち抜くか」

感心した様子の試験管の声に

「おいおっさん！　こいつどう考えてもテストで相手にするレベルのモンスターじゃねーだろ！！」

ワームを視界に捕らえながら悪態をつく。
それでもしっかりと螺旋矢（スパイラルアロー）を決めてゆく。
ワームに刺さる矢が１０を越えた辺りで動き回っていたワームが動かなくなった。

「お・・・た、倒したのか？」

警戒しつつ動かなくなったワームを見ていると、試験管から声がかかる。

「おい、あんまり近づくなよ」

「は？」

意味が分からず怪訝な顔で試験管を見返すと、無言で指をさす。
その方向は今動かなくなったばかりのワームが居る方で

「なにがあるってんだよ」

なんていいつつ視線を戻すと、ワームの背に亀裂が入り、何かが出てくるような感じでうごめいていた。

「何だよあれ・・・」

いきなりの展開に目が離せなくなっているとまたしても試験管の声が響く。

「ワームは一定のダメージを受け瀕死になることによって成虫となる。知らなかったのか？」

そんな話は聞いてない
説明を受けている間にワームの背中から体の半分くらいを抜け出した蛾のようなものがしわくちゃの羽を動かしている。

「ワームを倒すときは大体が一撃で仕留めるか毒などで殺す。ついでに教えといてやるが、成虫のパープモスの鱗粉には毒があるから

吸い込むなよ」

「貴様、よもや計ったな！」

既に冷静さのれの字もなくなった鏡が試験管に思いっきり悪態をつく。

「このくそ禿げめ！　後で茹で上げてやるから覚悟しとけ！」

流石の試験管も額に青筋を立てて居る中、鏡は弓を構えて二本の矢でパープモスの羽を打ち抜く。

飛べなくすれば怖い相手ではない。

そうして完全に動き出す前に二重掃射（ダブルストレイフィング）で矢を射ち込みまくった。

本数にして２０本近くの矢がパープモスに刺さったところで鏡の持つ矢が後数本になった。

「もう矢が・・・」

パープモスはというと、穴だらけになった羽を動かしつつワームの抜け殻から這い出てこちらを睨んでいる。

その淡い紫色の体に毒々しい羽、周囲には鱗粉か飛散している。

近づくのは無理か・・・

「仕方ない、これで仕留められなきゃ俺の負けだな」

呟いて弓を構える。

引き絞る弓がミシミシと嫌な音をたてるが無視してさらに引く。

そうして折れる直前まで弓をしならせていた矢を離す。

ゴッという音を響かせた矢はパープモスの眉間に羽を残し全てが突

き刺さった。

「うげぇ・・・Ｓｈａｒｐｎｅｓｓ（シャープネス）　Ｓｈｏｏｔｉｎｇ（シューティング）であれかよ」

そう言った鏡の手元にある弓は弦が伸び、さらには弓の部分が半分ほどまで折れかかっていた。

しかし、それだけの代償を払うだけの結果は得られた。

パープモスはその場に倒れ絶命し、試験管や二階からの傍観者たちの唖然とした表情。

その全てを見回した後、試験管に声を掛けた。

０５ー冒険に出よう！（前書き）

新キャラが二人ほど出ます。

０５ー冒険に出よう！

試験を終えてエトライたちと合流した俺はそのまま、すぐに依頼（クエスト）を受ける羽目になった。
理由は、俺が既にエトライたちのパーティーに所属していることになってたからだ。
因みに、パーティーとは複数人で一つの依頼を受けるためのグループだそうだ。
クエストにしたがって翌日の朝、町の北門に行くと質素だがしっかりとした作りの馬車が止まっていた。

「エトライ、俺クエストの内容を聞いてないんだけど？」

「あぁ、すまない。クエスト内容は隣国に出向いていた姫様の護衛だ。前にも言ったと思うがこの町からだと魔の巣窟を通らなければ王都であるクルエラ国に着けないんだよ」

そうか護衛依頼か・・・

「まて、それがなんで姫様って単語が出てくる。姫って言うくらいなら護衛の騎士くらいつれてるはずだろう？」

俺の疑問に答えたのは近くにいた鎧を着た騎士だった。

「それは我等だけでは魔の巣窟を抜けられないからだ」

「うわぁ！」

予想もしていない人物から声を掛けられ飛び上がるほどにビックリ

した。

「あっははは、や、すまない。そんなに驚くとは思わなかった」

どうやらエトライは気づいていたらしい。

出来れは俺にも教えて欲しかった。

「魔の巣窟は魔物の群れが何百という数があつまって居る場所でもあるからな、馬車を護衛している我等では離れたところに居るボスを討伐できないのさ」

騎士さんは俺の前まで来るとすっと右手を差し出してきた。

「俺はこの騎士団の隊長やっているレッズだ。話は聞いている、君がパープモスを倒した新人冒険者だろう？」

「アキラ・フカイズミです」

俺はその手を取り握手をした。

「・・・・・どういうことですか？」

よく分からずに頭にはてなマークを浮かべているとレッズさんは驚いた顔をしていた。

「おいおい、まさか知らないって訳じゃないだろう？　パープモスはBランクのモンスターだぞ」

「マジっすか？」

エトライの顔を見ると頷いていることから本当の事らしい。
呆然としていた俺だが、ふつふつと怒りが湧き上がってきた。

「あんのクソハゲめ！　だから俺は初心者が相手にするモンスターじゃねぇって言ったのに。こんど合ったら絶対ぶん殴ってやる！」

「まぁ、いいじゃないか、君も行き成りＢランクから始まるんだから」

レッズに諭されて何とか怒りを納めた俺は渋々ながらも弓の手入れをすることにした。
出発までにはまだ少し時間があるらしいから。
鞄からワックスなどを取り出して丁寧に磨いていく。
弓道部に入部したとき、自分の弓が欲しくてついつい貯金を使って数十万する物を買った。
それ以来大切に大切に使っているこの弓にも愛着がわいてきた。

「へぇ・・・森の民でもないのに弓を使うのか、随分な物好きもいたもんだねぇ」

いつの間にか俺の正面に立っていた相手がそう言ってきた。
顔を上げると、俺とそう年の変わらなそうな少年が弓を見ていた。
緑の色をした髪に翡翠色の瞳、身長は１６５~１７０くらいだろう。
着ている服は冒険者のそれとは違い町にいつ青年が着ているような普通のものだ。
ただ、不攣り合いなのが背中に背負った武器だろう。この世界では始めて目にする武器だが鏡には記憶にある。

（鎌だ、あんなもの武器にしてるなんて珍しい）

鏡の視線に気づかずじっくりと弓を見回した少年はぽつりと呟く。

「いい弓だ、大切にされてるのが分かる」

武器を褒められたことになんとなく嬉しくなる。

「そういえば君は随分と珍しい髪の色をしているな、黒・・・か、まるで・・・」

少年は最後の呟きは聞こえなかったが、やっぱり黒髪は目立つらしい。

（染めようかな～）

「お～いアキラー、集まってくれ！」

馬車の近くでレッズが呼んでいるので弓をしまって荷物を持つ。

「おや、君も馬車の護衛依頼を受けてたのか」

その少年もどうやらクエストを受けていたらしい。

馬車のところに着くと、エトライとリアードは既に居た。

「それでは、軽く自己紹介でもして出発しますか」

レッズの言葉に真っ先に反応したのは俺と一緒に来た少年だった。

「そっすね、オレはレギオ・リーファンク。これでもSランクの冒険者なんでよろしく」

「知ってると思うが、リアード・ローアンだ。同じくSランクだな」

「エトライ・フォン・ヴァルセントです。同じくSランク」

順調に三人の紹介が終わり、次に俺の番になった。

「アキラ・フカイズミです。昨日冒険者になったばかりのBランクです。足手まといかとは思いますがよろしくお願いします」

「へ～、行き成りBランクとは・・・期待してるぜ！」

レギオが肩に手を置いてきたので、軽く頭を下げた。

「俺はレッズ・オルファン、この騎士団の団長だ。諸君らには魔の巣窟を越えるために手伝ってもらいたい」

そうして全員の顔を見たあと、声を高らかに上げた。

「それでは、出発！」

こうして俺は首都に向かう冒険に出ることになった。

０５ー冒険に出よう！（後書き）

寒いです。
ここ最近ベッドから出たくない気ま猫です。
ここまで読んでくれている皆様方、この場を持って御礼を申し上げます。
未熟な私目の小説を楽しみにしてくれている皆様、本当にありがとうございます。
さてさて、今年も残すところあと十日と少しというところまでやってまいりました。
そろそろ大掃除の準備をし始めなければ大変かも知れません。
え、クリスマスがあるだろうって？
なにそれ、おいしいの？
一人身にそれは禁句です。

とりあえず、グダグダと何を言いたいかというと。

これからも気ま猫をよろしくお願いします～
と、言うことで　ではノシ

魔の巣窟（前書き）

今回は短めです。
っつか、ネタが浮かばない。
最近は新作の方書いてるほうが楽しくてしかたない。。。

魔の巣窟

魔の巣窟に着くまでの道のりは正直に言って暇で暇でしょうがなかった。
昼食の時にチラっと見た姫様がやけに美人さんだったな～なんて考えからよからぬ方向に思考が流れそうになることもしばしば・・・・・・。
馬車の護衛を始めてから3日ほど経った日のこと、なんだか不気味な感じの森に差し掛かった。
妙に捻じ曲がった木々が生い茂り、枝葉が天を覆うようにその手を伸ばしている。
本来聞こえるはずの鳥の囀りや風が葉を揺らす音、虫たちの鳴き声などと言ったものが皆無だった。
時折撫でるようにふく風は生暖かく、生物の吐息かなにかかと最初は勘違いした。

「おいアキラ、気を引き締めろよ。ここが、魔の巣窟だ」

隣をあるくレギオがそう教えてくれた。
まだ日は高いのに薄暗く、纏わりつくようなねっとりとした空気が気色悪い。

「ここが・・・魔の巣窟？」

思っていたのとは違う。
もっとオドロオドロした場所を思い浮かべていた俺としてはなんか肩透かしを食らった気分だ。
しかし、不気味さでは俺の予想以上だった。
正直、今すぐにでもこの場を逃げ出して、日の光の下で新鮮な空気

を胸いっぱいに吸い込みたい。
俺がそう考えてるとき俺らの前を歩いていた二人のうち一人が何かを察知したように身構えた。

「ニードルウルフの群れだ！囲まれてる！」

突然エトライが叫んだ。
それと同時に２０人近い騎士達が一斉に武器を構える。
それに伴って俺たちも武器を構えたところで、ハリネズミよろしく全身の毛が逆立ってる狼が飛び掛ってきた。
数はおおよそ５０前後、俺らの倍の数はいるだろう。

「気をつけろ、針には毒があるぞ！」

得物の鎌を振り回しながら狼の首を落とすレギオがそう言ってくれたのでそれに注意しつつ戦う。
周囲を見まわして敵が多そうなところ目掛けて弓を引き、眉間に目掛けて矢を放ち確実に仕留めていく。

「いい腕をしている。その調子で群れのボスを射止めてくれ！」

レッズが目の前に居る狼を切り伏せて剣で指し示す方向を見ると、一際大きい狼が回りにニードルウルフを従えてこちらを睨んでいた。
あいつを狙えばいいのか

「ただし、気をつけてくれよ。周りに居る雌を１匹でも殺すと激怒したボスが前線に出てくる」

それを聞いた俺は周りのことを一切頭から追い出し、ボスを射抜く

ためにしっかりと狙いを定め、矢を放った。
放たれた矢がボスにささり、甲高い声をあげて動かなくなった。
それと同時に、襲ってきていた狼が退却していった。

「お手柄だな」

リアードにバシっと背中を叩かれ痛みに若干顔をしかめつつも、褒められたことに嬉しさを感じた。

それからはずっと戦い通しだった。
三つ首の大蛇やカミキリムシの馬鹿でかいような奴、果てにはバイオプラントよろしく這いずり回って動く植物なんかも居た。
先に進むにつれて水の音が聞こえてきた。

「ふぅ、やっとこの川まで来たか」

疲労の色が濃い騎士たちではあったが、誰も怪我をした様子が見えないのは流石というべきだろう。
しかし、これならばリアードやエトライに要請が来たのも頷ける。
魔物とのエンカウント率はんぱじゃない。
これがゲームだったら最初の街から次の街に行く間に１０以上ＬＶが上がってるだろう。
しかもどいつもこいつも群れを成してるから数が多い。
逆に単体で居る相手は束になってかかっても物ともしないほどタフだ。
戦闘の繰り返しで緊張しっぱなしだった俺はそのとき、ふと気を抜いてしまった。
それがいけなかった。

がさっと音がして振り返ったところに、俺の胴体の半分ほどもある触手に打たれ、そのまま意識を失った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6974i/

未知なる世界の向こう側

2010年10月12日05時35分発行